

# 看護系大学の女子大学生がもつ子宮頸がん予防に関する知識と意識の現状

野口 真由<sup>1</sup>, 杉浦 絹子<sup>1</sup>

## Knowledge and awareness of cervical cancer prevention among female students of a nursing college

Mayu NOGUCHI and Kinuko SUGIURA

**Key Words:** cervical cancer, prevention, vaccination of Human Papillomavirus, screening examination, female college students

### I. 緒言

日本では毎年約 2,500 人の女性が子宮頸がん で死亡している (国立がん研究センターがん対策情報センター, 2010). 子宮頸がんによる入院や死亡は, 労働人口の減少に繋がる. また, 子宮頸がんは比較的早期に発見されても子宮切除により妊孕性が損なわれやすく (平井, 2010), これは少子化問題にも影響することである. このように子宮頸がんは様々な社会問題とも関連し合っているといえる.

子宮頸がんの発生は発がん性のヒトパピロウイルス (以下 HPV と記す) が主要因であり, HPV は性交経験がある女性は誰でも感染する可能性がある. 日本では近年, 20 歳代から 30 歳代の女性で子宮頸がんの発症率, 死亡数が増加しており, この年代で最も多いがんとなっている (国立がん研究センターがん対策情報センター, 2010). これは, 初交年齢の若年化とともに HPV の感染機会が若年化し, 子宮頸がんの発症年齢が早まったためと考えられている (荒川, 新野, 2009).

近年, HPV の感染を予防するためのワクチンができ, 世界中で接種され始めている. 日本でも, この HPV ワクチンは 2009 年 12 月から発売された. HPV ワクチンを接種することにより, 子宮頸がんの約 70% を予防することができる. HPV は性行為によって感染するものであり, 初交前にワクチン接種を受けることが最も効果的である (今野, 2010). そのため, 最も接種が推奨されるのは 11~14 歳である. しかし,

15~45 歳でも 40~60% の予防が可能とされている. これまではワクチン接種費用は全額自己負担であり, 接種にあたり高額な費用を支払わなくてはならなかったが, 2011 年度の国家予算に子宮頸がん予防ワクチンの公費助成を盛り込む方針が明らかにされた (中日新聞 a, 2010). しかし, 今回の助成の対象となるのは, 中学 1 年生~高校 1 年生であるため, 対象外の者は全額自己負担となり, 接種率が大幅に向上するとは考えにくい.

ワクチンによって子宮頸がんの 70% は予防可能であるが, 残りの 30% はワクチンでは予防することはできず, ほぼ 100% の確率で予防するためには, 子宮頸がん検診を合わせて受ける必要がある. しかし, 日本の子宮頸がん検診の受診率は 2 割程度と, 先進国の中でも最低のレベルである (今野, 2010). そのため, 政府は 20, 25, 30, 35, 40 歳の女性に子宮頸がん検診の無料クーポンを配布している. クーポン配布の目標として受診率 50% を挙げているが, 各都道府県の市区町村のホームページによるとクーポン配布後の受診率は 50% に届いていない地域が多く見られ, 目標は達成されていない.

このように, HPV ワクチン・子宮頸がん検診の普及には, 未ださまざまな課題も残されている. そのため, 国・地方自治体, 医療関係者, 企業などがこのような状況を把握し, 女性が積極的に子宮頸がん検診, HPV ワクチン接種を受けられるような体制を整えることが必要である. そこで本研究では, ワクチンによる予防効果も期待できる年代であり, また同年代の子

1 三重大学医学部看護学科

表1 子宮頸がんに関する知識

項目	M±SD	(n=188)						
		5:よく知っている	4:まあ知っている	3:どちらともいえない	2:あまり知らない	1:知らない	無回答	
子宮がんの約6割が子宮頸癌	2.7±1.3	11 (5.9)	61 (32.4)	9 (4.8)	65 (34.6)	42 (22.3)	0 (0.0)	
日本では年間1~2万人が子宮頸がん罹患	1.9±0.8	0 (0.0)	14 (7.4)	15 (8.0)	97 (51.6)	62 (33.0)	0 (0.0)	
日本では年間約2,500人が子宮頸がんで死亡	1.8±0.8	0 (0.0)	8 (4.3)	12 (6.4)	93 (49.5)	75 (39.9)	0 (0.0)	
子宮頸がんの治療により妊孕能が失われることがある	3.4±1.2	30 (16.0)	89 (47.3)	17 (9.0)	32 (17.0)	18 (9.6)	2 (1.1)	
日本では子宮頸がんが20歳代~30歳代の女性のがんの頻度で最も多い	3.3±1.3	34 (18.1)	71 (37.8)	20 (10.6)	42 (22.3)	20 (10.6)	1 (0.5)	
子宮頸がんの発症はHPV(ヒトパピローマウイルス)が主要因	3.3±1.5	53 (28.2)	50 (26.6)	16 (8.5)	31 (16.5)	38 (20.2)	0 (0.0)	
女性の約8割が一生のうちに1回はHPVに感染	2.3±1.3	15 (8.0)	29 (15.4)	18 (9.6)	55 (29.3)	71 (37.8)	0 (0.0)	

宮頸がんの罹患率・死亡率が増加している現状において、看護系大学に在学する女子大学生が子宮頸がん予防についてどの程度の知識を持ち、どのような意識でいるのかを明らかにし、子宮頸がん予防の啓発活動において求められる事柄について考察することにした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象・調査方法

調査対象はX県内X大学看護学科に在学中の2~4年生の女子学生であった。学内での講義の際に、無記名自記式調査票を配布し、講義終了後に回収した。倫理的配慮として、調査票に添付した調査趣旨説明書に、回答は任意であること、匿名であること、プライバシーは保護されること、学術研究目的以外には使用しないことを明記するとともに、配布時に口頭で説明した。回収をもって同意が得られたものとした。調査期間は2010年6月~7月の約6週間であった。

### 2. 調査内容

調査票の質問は、対象の属性・背景、子宮頸がんに関する知識、子宮頸がん予防ワクチンの認知度、子宮頸がん予防ワクチンに関するポスター・CMを見た経験、子宮頸がん予防ワクチンに関する知識、子宮頸がん予防ワクチンの接種経験と未接種の理由、子宮頸がん検診に関するポスター・CMを見た経験、子宮頸がん検診に関する知識、子宮頸がん検診の受診経験、子宮頸がん検診未受診の理由で構成した。

### 3. 分析方法

統計解析ソフトSPSS 18.0 J for Windowsにデータ入力し、記述統計をみた。

## III. 結果

### 1. 回収状況

219部配布し、188部回収され(回収率85.8%)、すべて有効回答であった。

### 2. 対象の属性・背景

平均年齢は20.4±1.0歳、年齢の範囲は19歳から22歳であった。学年は2年生65名、3年生65名、4年生58名、全員未婚であった。

### 3. 子宮頸がんに関する知識

子宮頸がんに関する知識について「よく知っている」、「まあ知っている」、「どちらともいえない」、「あまり知らない」、「知らない」の5段階で問う質問では、「日本の子宮頸がんの死亡数(平均値1.8±0.8)」、「日本の子宮頸がんの罹患患者数(平均値1.9±0.8)」、「女性の約8割が1回はHPVに感染する(平均値2.3±1.3)」の順で認知度が低かった。逆に比較的認知度が高かったのは、「子宮頸がんの治療により妊孕能が失われることがある(平均値3.4±1.2)」、「日本では子宮頸がんが20歳代~30歳代の女性のがんの頻度で最も多い(平均値3.3±1.3)」、「子宮頸がんの発症はHPVが主要因(平均値3.3±1.5)」であった(表1)。

### 4. 子宮頸がん予防ワクチンの認知度

子宮頸がん予防ワクチンを知っているかを尋ねた質問では、「はい」と答えた者は150名(79.8%)で、ほぼ8割の者がワクチンの存在を認知していた。

### 5. 子宮頸がん予防ワクチンに関するポスター・CMを見た経験

子宮頸がんのワクチンに関するポスター・CM（以下広告と記す）を見たことがあるかを尋ねた質問では、「はい」と答えた者が136名（72.3%）で、7割強の者が何らかの形で予防ワクチンに関する広告を見たことがあった。

子宮頸がん予防ワクチンに関する広告を見たことがあると答えた者に対して、広告を見たのは意図的に見たものなのかどうかを「5. そうである」、「4. まあそうである」、「3. どちらともいえない」、「2. どちらかといえばちがう」、「1. ちがう」の5段階で尋ねる質問では、回答の平均値は3.8±1.3であった。その内訳は「1. ちがう」と答えた者が最も多く57名（41.9%）、その次に「2. どちらかといえばちがう」が37名（27.2%）、「4. まあそうである」が19名（14.0%）と続いた（図1）。

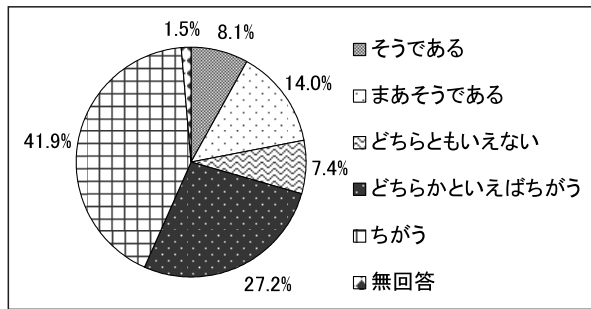


図1 子宮頸がん予防ワクチンの広告を意図的に見たか (n=136)

また、子宮頸がん予防ワクチンに関する広告を見たことがあると答えた者に対して、その内容に興味を持ったかを「5. 興味をもった」、「4. まあ興味をもった」、「3. どちらともいえない」、「2. あまり興味をもたなかった」、「1. 興味をもたなかった」の5段階で尋ねる質問では、平均値は4.4±0.7であった。その内訳は「5. 興味をもった」が62名（45.6%）、「4. まあ興味をもった」が46名（33.8%）と多く、その後は「3.

どちらともいえない」が10名（7.4%）、「2. あまり興味をもたなかった」が3名（2.2%）であり、「1. 興味をもたなかった」と答えた者はいなかった（図2）。

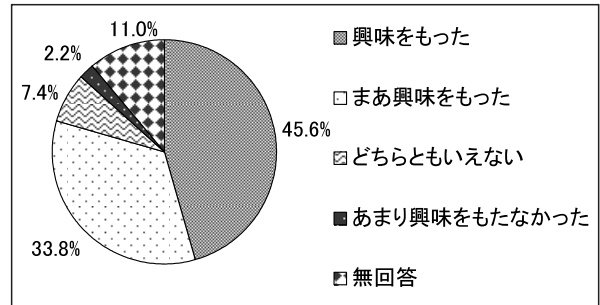


図2 子宮頸がん予防ワクチンへの広告に興味 (n=136)

### 6. 子宮頸がん予防ワクチンに関する知識

子宮頸がん予防ワクチンを知っていると答えた150名に対して、子宮頸がん予防ワクチンに関する知識について「5. よく知っている」、「4. まあ知っている」、「3. どちらともいえない」、「2. あまり知らない」、「1. 知らない」の5段階で尋ねた質問で、認知度が最も低かったのは「子宮頸がん予防ワクチンによる重い副作用はない（平均値2.6±1.2）」で28名（18.7%）が「知らない」、55名（36.7%）が「あまり知らない」と回答している。次に認知度が低かったのは「子宮頸がん予防ワクチンは3回の接種が必要（平均値3.0±1.5）」で、「まあ知っている」と「あまり知らない」と答えた者が同数で38名（25.3%）であった。3番目に低かったのは「子宮頸がん予防ワクチン接種では1回につき1万2千円（ワクチン代のみ）かかる（平均値3.2±1.5）」で、「まあ知っている（41名[27.3%]）」、「よく知っている（38名[25.3%]）」であった（表2）。

表2 子宮がん予防ワクチンに関する知識

(n=150)

項目	M±SD	5:よく知っている	4:まあ知っている	3:どちらともいえない	2:あまり知らない	1:知らない	無回答
ワクチンによって70%の子宮頸がんが予防できる	3.2±1.2	17 (11.3)	65 (43.3)	17 (11.3)	38 (25.3)	12 (8.0)	1 (0.7)
ワクチンによる重い副作用はない	2.6±1.2	11 (7.3)	36 (24.0)	19 (12.7)	55 (36.7)	28 (18.7)	1 (0.7)
ワクチンは3回の接種（初回、1ヶ月後、6ヶ月後）が必要	3.0±1.5	33 (22.0)	38 (25.3)	8 (5.3)	38 (25.3)	32 (21.3)	1 (0.7)
ワクチン接種では1回の接種につき1万2千円（ワクチン代のみ）が必要	3.2±1.5	38 (25.3)	41 (27.3)	13 (8.7)	27 (18.0)	30 (20.0)	1 (0.7)

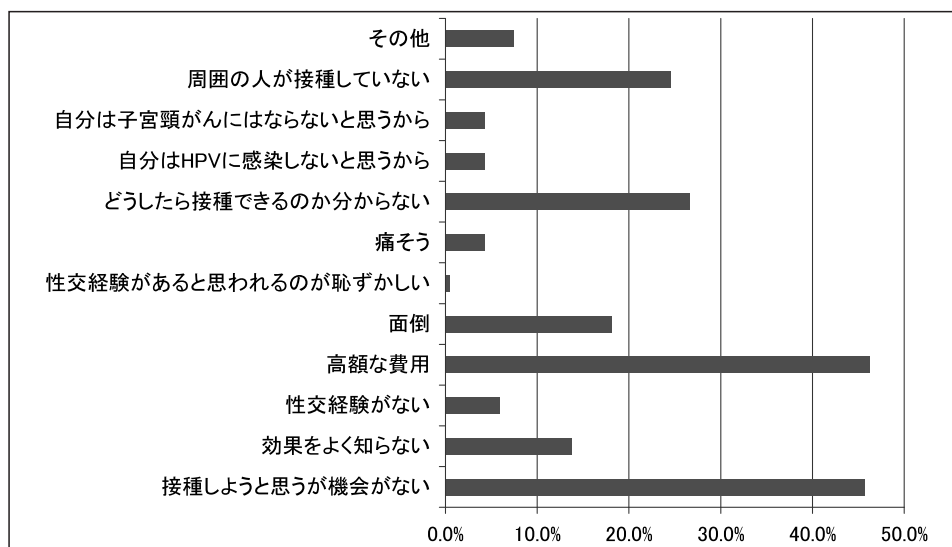


図3 子宮頸がん予防ワクチンを接種しない理由  
(複数回答可) (n=180)

### 7. 子宮頸がん予防ワクチンの接種経験

子宮頸がん予防ワクチンの接種経験の有無については、「はい」と答えた者が3名(1.6%)、「いいえ」と答えた者が180名(95.7%)で、ほとんどの者がワクチンを接種していなかった。

### 8. 子宮頸がん予防ワクチン未接種の理由

ワクチンの接種経験がないと答えた180名に対して、ワクチン接種をしない理由について尋ねた。その中で回答率が高かったのは「高額な費用」で、87名(48.3%)であった。次に多かったのは「接種しようと思うが機会がない」86名(47.8%)、次に「どうしたら接種できるのか分からない」50名(27.8%)と続いた(図3)。その他の項目で回答率が比較的高かったのは「周囲の人が接種していない」46名(25.6%)であった。

回答率が低かったのは、「性交経験があると思われるのが恥ずかしい」で1名(0.6%)であった。次に「痛そう」、「自分はHPVに感染しないと思うから」、「自分は子宮頸がんにはならないと思うから」が同数で各8名(4.4%)であった。「その他」では、「予防ワクチンの存在を知らない(4名)」、「最近知ったので(1名)」、「子宮頸がんについてあまり考えたことがないから(1名)」、「20歳になったらただで打ってもらえると聞いたからその時に(1名)」、「副作用についてよくわかっていない(1名)」、「年齢が低いうちに接種した方がよいといった内容を見た(2名)」、「まだいらなと思う、しなくていい(1名)」という記述がみられた。

### 9. 子宮頸がん検診の認知度

子宮頸がん検診を知っているかの質問では、「はい」と答えた者が146名(77.7%)で、約8割の者が検診を知っていることが分かった。

### 10. 子宮頸がん検診に関するポスター・CMを見た経験

子宮頸がん検診に関するポスター・CM(以下広告と記す)を見たことがあるかを尋ねた質問では、「はい」と答えた者が123名(65.4%)であった。この123名に対して、広告を見たのは意図的に見たもののかを「5. そうである」、「4. まあそうである」、「3. どちらともいえない」、「2. どちらかといえばちがう」、「1. ちがう」の5段階で尋ねた質問では、平均値は2.1±1.3であった。「1. ちがう」と答えた者が最も多く55名(44.7%)、次に「2. どちらかといえばちがう」28名(22.8%)、「3. どちらともいえない」16名(13.0%)の順であった(図4)。この123名に、広告の内容に興味をもったかを「5. 興味をもった」、「4. まあ興味をもった」、「3. どちらともいえない」、「2.

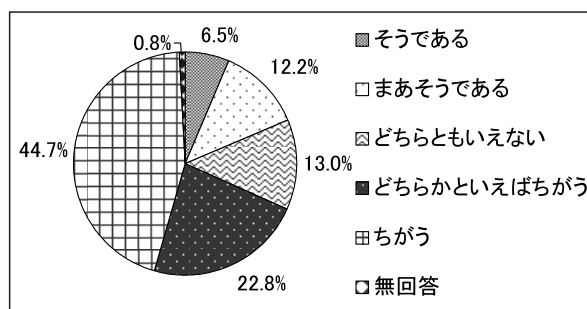


図4 子宮頸がん検診の広告を意図的に見たか (n=123)

表3 子宮頸がん検診に関する知識

項目	M±SD						(n=188)	
		5:よく知っている	4:まあ知っている	3:どちらともいえない	2:あまり知らない	1:知らない	無回答	
HPV ワクチンを接種していても、ほぼ100%の確率で予防するには子宮頸がん検診を受ける必要がある	3.0±1.4	21 (11.2)	40 (21.3)	16 (8.5)	34 (18.1)	25 (13.3)	10 (5.3)	
日本の子宮頸がん検診受診率は他の先進国に比べ低い	3.0±1.4	23 (12.2)	38 (20.2)	15 (8.0)	33 (17.6)	26 (13.8)	11 (5.9)	
自分の所属する自治体・地域における子宮頸がん検診の費用を知っている	2.3±1.3	10 (5.3)	23 (12.2)	14 (7.4)	37 (19.7)	52 (27.7)	10 (5.3)	

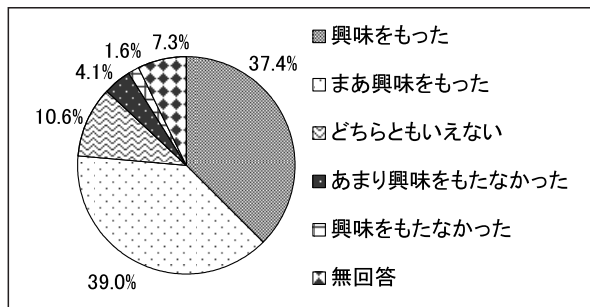


図5 子宮頸がん検診の広告に対する興味 (n=123)

あまり興味をもたなかった」、「1. 興味をもたなかった」の5段階で尋ねた。平均値は4.1±1.0で、「5. 興味をもった」46名(37.4%)、「4. まあ興味をもった」48名(39.0%)、「3. どちらともいえない」13名(10.6%)、「2. あまり興味をもたなかった」は5名(4.1%)、「1. 興味をもたなかった」は2名(1.6%)であった。

#### 11. 子宮頸がん検診に関する知識 (表3)

子宮頸がん検診を知っていると答えた者163名に対して、

して、子宮頸がん検診に関する知識について「5. よく知っている」、「4. まあ知っている」、「3. どちらともいえない」、「2. あまり知らない」、「1. 知らない」の5段階で尋ねた。そのなかで認知度が最も低かったものは「自分の所属する自治体・地域における子宮頸がん検診の費用 (平均値2.3±1.3)」であった。「HPV ワクチンを接種していても、ほぼ100%の確率で予防しようと思うと、子宮頸がん検診を受ける必要がある」と「日本の子宮頸がん検診の受診率は、他の先進国に比べ低い」はどちらも平均値は3.0±1.4であった。

#### 12. 子宮頸がん検診の受診経験

子宮頸がん検診の受診の有無については、「有」が18名(9.6%)、「無」が163名(86.7%)、無回答が7名(3.7%)であった。

#### 13. 子宮頸がん検診未受診の理由 (図6)

検診の受診経験がないと答えた者163名に対して、選択肢で理由を求めた(複数回答可)。その中で回答

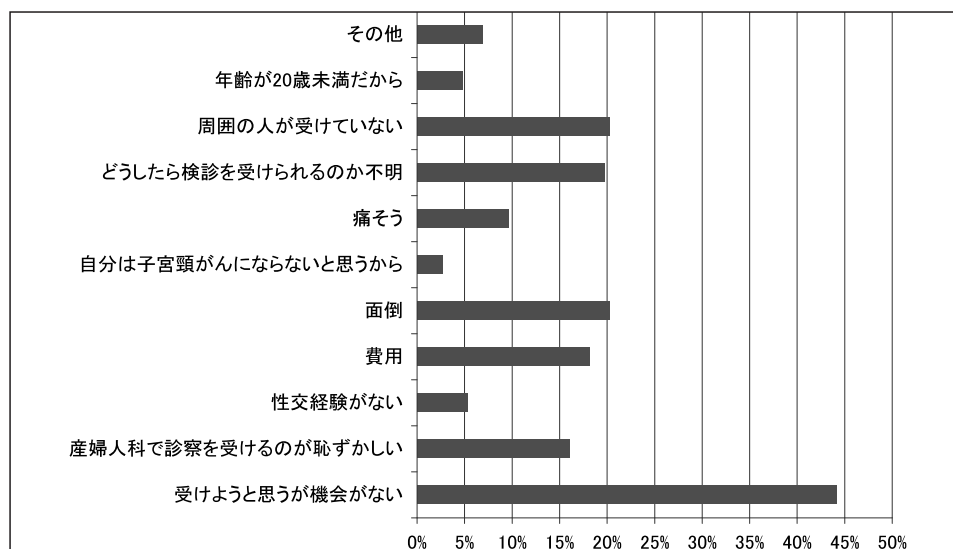


図6 子宮頸がん検診未診の理由 (複数回答可) (n=163)

率が高かったのは、「受けようと思うが機会がない」83名(50.9%)、次に「面倒」、「周囲の人が受けていない」が同数で38名(23.3%)あった。「どうしたら検診を受けられるのか分からない」37名(22.7%)、「費用」34名(20.9%)も比較的回答率が高かった。逆に回答率が低かったのは、「自分は子宮頸がんにならないと思うから」5名(3.1%)、「年齢が20歳未満だから」9(5.5%)、「3. 性交経験がない」10名(6.1%)であった。「その他(12名)」の記述は、「受けようと思わない(1名)」、「行く機会を逃した(そのうち2名は「住民票が他県にあり、受けられない」)(5名)」、「受ける予定(5名)」、「何となく(1名)」、「まだする必要なし(1名)」であった。

#### IV. 考 察

##### 1. 子宮頸がんに関する認知度

調査対象は若者の子宮頸がんの頻度が高いことやHPVが子宮頸がんの主要因であることは約5割半の者は知っているようだが、実際のHPV・子宮頸がんの罹患率、子宮頸がんの死亡率の具体的な値については知らない者が多かった。子宮頸がんの治療により妊孕能の喪失を招くことがあることは、他の項目と比べ認知度は高かったが、それでも平均値は $3.4 \pm 1.2$ にとどまった。子宮頸がんの認知度に関しては、目下のところ日本で唯一承認されている子宮頸がん予防ワクチンの製造会社であるグラクソ・スミスクライン社(以下GSKと記す)でも20代から40代の女性を対象に調査を行っており、結果は認知度64.5%であった。年齢別では20代前半が44.1%、20代後半で58.6%となっており、30代ごろから徐々に関心が高まり30代前半で65.4%、後半で74.0%とであった(産経新聞, 2010)。本研究の対象が看護学生であったことから、GSKの調査より認知度は高くなっているが、看護学生であっても十分な知識は持っておらず、医療に関わる機会の少ない医療関係者以外の者であればなおさらと納得のいく結果である。

HPVや子宮頸がんに関する知識が十分でないことから、多くの者が自分がそれらに罹患する危機感をあまり持っていない可能性が高いのではないかと考える。特に子宮頸がんの罹患率が高まっている若年者の認知率が低いことから、若年層への子宮頸がんの周知活動に力を入れていく必要があると思われる。子宮頸がん、あるいはその治療が身体に及ぼす影響について周知し、子宮頸がんの予防の重要性を理解してもらう必要がある。

##### 2. 子宮頸がん予防ワクチン認知度と広告の効果

ほぼ8割の者が子宮頸がんワクチンが存在することは知っていた。しかし、回答者は将来看護職を目指す看護学生であるため、一般の方へ同じ質問を行った場合は、もっと認知度が低くなると思われる。前掲のGSKによる子宮頸がん予防ワクチンの認知度調査によると、ワクチン発売前の認知度は20.3%であったが、発売後は57.7%と増加したという。このことについてGSKは、報道などの影響で、病気の詳しい内容は知らないものの、ワクチンの存在は知っているという人が多いとしている(産経新聞, 2010)。GSKの調査は2010年3月に実施されたものであり、本研究は同年の6~7月に実施したものである。また、対象が看護学生であることから、ワクチン認知度はGSKの結果より高くなっているが、子宮頸がんの知識に関する調査結果と併せて考えると、GSKの結果同様、子宮頸がんについて良く知らない状態でワクチンの存在を知っている者が多いと思われる。

子宮頸がん予防ワクチンに関する広告について尋ねた質問では、「広告を見たことがある」と答えた者は72.3%で、広告を用いた周知活動には大きな効果があるといえる。しかし、広告を見たのは意図的に見たものなのかを尋ねた結果、「ちがう」と答えた者が最も多く41.9%、その次に「どちらかといえばちがう」が27.2%と続いた。そのため、広告の方から目や耳に入って来ない限り、自分から調べることは少ないことが分かる。一方で、広告の内容への興味を尋ねた質問では、「興味をもった」が45.6%、「まあ興味をもった」が33.8%と多く、「興味をもたなかった」と答えた者はいなかった。このことから、広告の内容にはある程度は興味をもってもらえることが分かる。そのため、より多くの人々が子宮頸がん予防ワクチンに関する広告に触れる機会を持てるように工夫する必要がある。また、子宮頸がんに関する知識を十分に持っていない状態で子宮頸がん予防ワクチンの情報を得ている人が多いことから、ワクチンの情報を提供する際に、子宮頸がんに関する情報も得られるようにし、よりワクチンの重要性を感じられるようにする必要があると思われる。

##### 3. 子宮頸がん予防ワクチンに関する知識

子宮頸がん予防ワクチンを知っていると答えた者に、子宮頸がん予防ワクチンに関する知識を尋ねた。「子宮頸がん予防ワクチンによって70%の子宮頸がんが予防できる」ということについては他項目に比べて認知度は高かったが、それでも「まあ知っている」「知っている」を合わせて5割程度しかない。そのため、子宮頸がん予防ワクチンの効果についてあまり知らずに

いる者も少なくないことが分かる。

また質問項目の中で最も認知度が低かったのは、「子宮頸がん予防ワクチンによる重い副作用はない」であった。4割以上の者が子宮頸がん予防ワクチンに副作用はほとんどないとされていることを知らずにいることが分かった。副作用についてよく知らなければ、接種に踏み切れない者も多いと思われる。

次に認知度が低かったのは「子宮頸がん予防ワクチンは3回の接種が必要」で、「知らない」と「あまり知らない」と答えた者を合わせると約4割の者が3回接種ということを知らないことが分かった。また、「子宮頸がん予防ワクチン接種では1回につき1万2千円（ワクチン代のみ）かかる」ということについては、「知らない」と「あまり知らない」と答えた者を合わせると約3割であった。そのため、子宮頸がん予防ワクチンの存在は知っていたとしても、効果や接種方法・費用についてよく知らない者は少なくないことが分かった。

#### 4. 子宮頸がん予防ワクチンの接種率と未接種の理由

子宮頸がん予防ワクチンの接種経験有の者は1.6%で、ほとんどの者がワクチンを接種していないことが分かる。子宮頸がん予防ワクチンの接種経験がないと答えた者に対して、接種をしない理由について尋ねたところ、回答率が高かったのは「高額な費用」(48.3%)であった。この研究の対象が学生であるだけに余計に費用について敏感になっていることも考えられるが、接種は1回1万2千円と高額で、3回接種すればワクチン代だけで4~5万円が必要となり、学生でなくとも手が出にくい値段である。後々子宮頸がん罹患した場合のことを考えれば高いとは言えないが、自分が罹患するか分からない状態ではこの費用を安価とは捉えにくいと思われる。しかし、前述のとおり費用の問題に対しては国も動き始めており、2011年度予算の概算要求に子宮頸がん予防ワクチンの公費助成が盛り込まれた。しかし、今回の概算要求案は、子宮頸がん予防接種を助成する市町村の費用の3分の1を補助する内容で、10歳代を対象にするものである(厚生労働省健康局, 2010)。そのため、対象年齢外の者はこれまでと同様高額な費用を自分で支払うことになるため、接種に踏み切れない人も多いことが予想される。

次に理由として多かったのは「接種しようと思うが機会がない」であり、47.8%の回答率であった。半年以内に3回の接種が必要であるため、忙しい者にはスケジュール調整が難しいこともあるだろう。3番目に多かったのは「どうしたら接種できるのか分からない」

(27.8%)であった。接種までの手続きが分からなければ、接種しようと思ってもできない。そのため、ワクチン接種を受けるあるいは接種について相談したい場合の連絡先の情報を広めるなどの工夫をすることで接種率の向上が見込めるのではないと思われる。また、これら以外に回答率が比較的高かったものとして、「周囲の人が接種していない」(25.6%)があった。ワクチンが承認されてから日が浅いことより、効果について未知な部分が多く、周囲の人の経験を参考にしよう様子を窺っている者も多いのではないと思われる。また周囲の「他の人に合わせる」という日本人の性格上の特徴も影響しているかもしれない。ゆえに、公費補助により10歳代のワクチン接種率が上がれば、接種への意欲を持つ者も多くなることが見込めると思われる。逆に接種をしない理由として回答率が低かったのは「性経験があると思われるのが恥ずかしい」、「痛そう」、「自分はHPVに感染しないと思うから」、「自分は子宮頸がんにはならないと思うから」といったものである。接種にあたり、羞恥心や疼痛への不安はあまり強くないようである。しかし、「自分はHPVに感染しないと思うから」、「自分は子宮頸がんにはならないと思うから」に関しては、生涯にわたって性交をするつもりがない場合を除き、罹患しないという根拠はない。また、「その他」の記述では「子宮頸がんについてあまり考えたことがないから」、「まだいらなと思う、しなくていい」との回答も見られた。回答者の性交経験の有無は不明であるが、今回の対象は大学生であることからこの中に性交経験者がいてもおかしくない。また、対象は看護学生であり子宮頸がんの要因がHPVであることを知っている者も5割程度いる。そのため、保健医療関係者でない場合、根拠なく自分は罹患しないと考えている者はさらに多くいるのではないと思われる。

「その他」の記述にみられたものは、「予防ワクチンの存在を知らない」、「ワクチンについて最近知ったので」という項目のほか、「20歳になったらただで打ってもらえると聞いたからその時に」と子宮頸がん検診と混同しているような回答もあった。また、「副作用についてよくわかっていない」、「年齢が低い(10代前半)に接種した方がよい(効果がない)」といった内容を見た(聞いた)」とワクチンの効果、副作用についての知識が不十分なために接種をしていない者もいるようである。そのため、ワクチンの作用・副作用について正しい知識を普及させることも重要である。

#### 5. 子宮頸がん検診の認知度と広告の効果

子宮頸がん検診を知っているかの質問では、「はい」

と答えた者は77.7%であった。世川らによる子宮頸がんに関する一般女性の認知度調査の結果では「子宮頸癌検診を知っている」と答えたものは41.3%で、若年であるほど認知度が低くなっていたと報告されている(世川, 井上, 2008)。ワクチンができたことで検診への関心が高まったこともあり、また本研究の対象者が看護系大学の学生であることから、世川らによる研究よりも認知度が高くなったと思われる。しかし、それでも8割以下であり、子宮頸がん予防ワクチンと合わせてさらなる周知活動が必要である。

子宮頸がん検診に関する広告を見たことがあるかの質問では、「はい」と答えた者が65.4%で、子宮頸がん検診について知っている者の中で広告から情報を得た者は多いようである。世川らの研究によると、子宮頸がん検診の認知経路で多かったのは「病院などの医療機関」、「テレビ番組」で、それぞれ35.0%と31.0%であった。また、10代、20代の若年層では「学校の授業」による認知度が高くなっていたとの報告がある(世川, 井上, 2008)。本調査でも検診の広告を見たことがある者が65%いたことから広告の影響は大きいと思われる。そして、世川らの研究結果から病院や学校における活動・指導も子宮頸がん検診の周知には効果的であることが分かる。また、広告を見たことがある者に対して、広告を見たのは意図的であったかを尋ねたところ、「そうである」、「まあそうである」と答えた者は合わせて18.7%であり、広告を見た者の大半が意図的ではないことが分かる。しかし、広告の内容に興味を持ったかを5段階で尋ねた結果、平均値は4.1で、多くの者が広告を見たときに内容に興味を持つことが分かった。そのため、広告で周知することの効果は高いと思われる。そして、内容に興味を持つ者が多いということから、検診受診に向け、対象者が知りたいと思う内容を盛り込むことで検診率をあげることが可能であると思われる。

## 6. 子宮頸がん検診に関する知識

子宮頸がん検診を知っている者に対して、子宮頸がん検診に関する知識を尋ねた。そのなかで認知度が最も低かったものは「自分の所属する自治体・地域における子宮頸がん検診の費用」についてであった。しかし、これについては検診無料券の配布があるため、実際の費用について知らない者が多くなっている可能性もある。「HPVワクチンを接種していても、ほぼ100%の確率で予防しようと思うと、子宮頸がん検診を受ける必要がある」、「日本の子宮頸がん検診の受診率は、他の先進国に比べ低い」という項目については「知らない」あるいは「あまり知らない」と答えた者と「知っ

ている」「まあ知っている」と答えた者の割合がほぼ同率であった。特に「HPVワクチンを接種していても、ほぼ100%の確率で予防しようと思うと、子宮頸がん検診を受ける必要がある」ということについては、子宮頸がん予防を徹底的に行う上で重要なことであるため、より広く周知していく必要がある。

## 7. 子宮頸がん検診の受診率と未受診の理由

子宮頸がん検診の受診の有無については、受診したことがある者は1割未満であることが分かった。そのため、検診の受診経験がない者に対して、その理由を尋ねた。その中で回答率が高かったのは、「受けようと思うが機会がない」で、50.9%の者が選択していた。ワクチンと同様、機会がないということが理由として一番に挙がっており、これは世川らによる研究と同じ結果である(世川, 井上, 2008)。2年に1回の受診が必要というところで、ワクチンほど短い期間で受診が必要になるわけではないが、学生の場合、講義や部活、アルバイトなどで予定が合わせにくいということもあると思われる。また、「その他」の記述では、検診受診の機会を逃した理由として「住民票が他県にあり、受けられない」と記していた者もいた。検診無料券に受診場所の指定や期限があることから、無料券を使って受診できず諦めてしまう者も少なくないようである。三重県でも2009年度の子宮頸がん検診無料券の利用率は23.4%と低いが、市町村別でみると利用率に差があり、防災無線やはがきで受診を呼び掛けた地域などは利用率が高くなっていたことが分かっている(中日新聞b, 2010)。そのため、無料券が配布されるだけでは認識はまだ薄いと思われ、定期的に注意喚起を行っていくことが必要であるといえる。次に多かったのは「面倒」、「周囲の人が受けていない(23.3%)」であった。検診受診を面倒と思う者は少なくないと思われる。そのため、そのような者いかに検診の重要性を理解してもらうかが重要になる。また、「周囲の人が受けていない」は、ワクチン未接種の理由としても挙がっていたことであり、検診の内容が未知なものであることから周囲の人々の検診経験を踏まえて受診をするか否かを考えている者がいることや、日本人の性格的特徴が影響していることも考えられる。また、「どうしたら検診を受けられるのか分からない(22.7%)」、「費用(20.9%)」も比較的回答率が高かった。検診の受診方法が分からなければ意欲があってもできないため、検診の方法を周知することも受診率の向上には大切なことである。費用に関しては、学生にとって大きな壁であり、また、検診無料券があるだけに費用を自分で負担して受診する気持ちにはなれないということ



もあると思われる。大島が大学3, 4年に実施した調査では、子宮頸がん検診の受診に関して「親から勧められれば受けようと思う」と答えた者が77.3%で、親の意向が大きく影響することが報告されている(中日新聞c, 2010)。そのため、学生の検診受診を勧めるには、親の理解を深めることも重要なことであると考ええる。逆に回答率が低かったのは、「自分は子宮頸がんにならないと思うから」、「年齢が20歳未満だから」、「性交経験がない」であった。性交経験がなければ受診の必要性はないが、「自分は子宮頸がんにならないと思うから」や「その他」の回答で「受けようと思わない」、「何となく」、「まだする必要なし」と回答した者もいる。この回答者の性交経験は不明であるが、根拠もなくそのような考えでいることもありうるため、検診の重要性とともに、どのような人に検診が必要なのかについても情報提供していく必要がある。

## V. 結 論

本研究では、看護系女子大学生のもつ子宮頸がん予防ワクチン接種と子宮頸がん検診に関する知識と意識について調査を行った。ワクチンや検診の存在を知っている者は8割近くいたが、その詳しい内容やHPVや子宮頸がんについて十分に正確な知識を得ている者は少なかった。予防ワクチン・検診ともに広告等の啓発活動において対象が必要とする情報を盛り込むことが求められる。

## 文 献

- 荒川一郎, 新野由子 (2009) : 若年女性の健康を考える子宮頸がん予防ワクチン接種の意義と課題, 厚生指針, 第56巻第10号, 1-6
- 中日新聞 a : ワクチンへの助成急げ, 2010年8月18日朝刊, 7
- 中日新聞 b : 無料検診券, 利用伸びず, 2010年8月27日朝刊, 21
- 中日新聞 c : 子どもに予防の教育を, 2010年9月9日朝刊, 18
- 平井康夫 (2010) : 子宮頸がんとは~予防の必要性, 思春期学 vol.28, 123-126
- 今野良 (2010) : HPV ワクチンとは-子宮頸がんの予防効果, 思春期学 vol.28, 127-134
- 上坊敏子 (2009) : 【進行子宮頸がんの治療戦略】外科療法, 看護技術 vol.55, 21-25
- 川名敬 (2009) : 子宮頸がんの新たな予防戦略-予防ワクチンの導入や検診方法の見直しに関する展望, 公衆衛生 vol.73, 886-893
- 川名敬 (2010) : ヒトパピローマウイルス (HPV) とは, 思春期学 vol.28, 115-122
- 国立がん研究センターがん対策情報センター : 子宮頸がん [http://ganjoho.jp/public/cancer/data/cervix\\_uteri.html](http://ganjoho.jp/public/cancer/data/cervix_uteri.html)
- 厚生労働省健康局 : 平成23年度予算概算要求の概要, [http://www.mhlw.go.jp/wp/yosan/yosan/11\\_gaisan/dl/kenkou.pdf](http://www.mhlw.go.jp/wp/yosan/yosan/11_gaisan/dl/kenkou.pdf), 入手日 2010年9月13日
- ニホン・ミック (2010) : 若い世代低い認知度, 健康りてらしい通巻458号, 88
- ニホン・ミック (2010) : 公費助成, 地方からじわり, 健康りてらしい通巻458号, 88-89
- ニホン・ミック (2010) : 検診者が急増, 健康りてらしい通巻460号, 89
- 世川寿之, 井上正樹 (2008) : 子宮頸癌に関する一般女性の認知度調査, 日本医事新報 N 0.4401, 68-72

キーワード : 子宮頸がん, 予防, ヒトパピローマウイルスワクチン, 検診, 女子大学生

